第16回沖縄県教育委員会会議（定例会）

1　日時　　平成22年11月17日　　15時00分～16時39分

2　場所　　教育庁第一会議室

3　出席者

委員	比嘉　委員　（委員長） 鎌田　委員 安次嶺　委員 中野　委員 新垣　委員 金武　委員　（教育長）	（欠席委員）

教育庁	統括監等	教育指導統括監、教育管理統括監、参事
	課長及び班長等	総務課長　財務課長　施設課長　福利課長、 県立学校教育課長　義務教育課長　保健体育課長、 生涯学習推進監　文化課長　全国高校総体推進課長
	職務のため出席した者	（事務局） 総務課総務班班長、同班主査、 県立学校教育課人事班主幹、同班主査、 同課特別支援教育班主任指導主事、同班指導主事

4　傍聴した者

記者２人　／　その他０人

平成22年第16回県教育委員会会議（定例会）

（開会15:00）

委員長	ただ今から平成22年第16回県教育委員会会議・定例会を開催します。 はじめに会期の決定を行います。本日１日を予定しておりますが、よろしいでしょうか。
各委員	はい。
委員長	このとおり決定します。 今回の会議録署名人は安次嶺委員にお願いします。
安次嶺委員	はい。
委員長	次に教育長報告をお願いします。
教育長	資料にはございませんが、本日の新聞報道にありますように、組踊がユネスコの無形文化遺産に登録されました。詳細は後日報告いたします。
委員長	それでは議事に入ります。 本日の議題は議案が４件となっております。なお、議案第３号及び第４号は人事案件となっておりますので非公開としたいと思いますがよろしいでしょうか。
各委員	はい。
委員長	では、このとおり決定します。 それでは議案第１号の説明をお願いします。
総務課長	（議案第１号の説明） ・教育委員会の権限事務に係る教育長の臨時代理の承認について（議案「沖縄県教育長の給与、勤務時間その他の勤務条件に関する条例等の一部を改正する条例」及び「沖縄県職員の給与に関する条例等の一部を改正する条例」に対する意見）
委員長	御質疑ございますか。
中野委員	この不景気の中、給与を下げる社会全般の動きと、公務員もそれに準じている状況はわかるが、義務教育等教員特別手当が現行の11,700円から改正案では8,000円になり、3,700円の減になる。これは計算方法があるのか。
総務課長	算定率というものがあり、これが現行の2.2%から1.5%に引き下げられます。この金額は上限となっており、給料に応じての率がありますので、一律8,000円というわけではありません。
委員長	他にございますか。 （しばし間があり） では、このとおり決定してよろしいですか。

各委員	はい。
委員長	このとおり決定します。 次に、議案第２号の説明をお願いします。
県立課長	（議案第２号の説明） ・平成23年度沖縄県立特別支援学校の高等部の入学定員について
委員長	御質疑ございますか。
鎌田委員	今年度から志願前相談を実施したのは、全国的なことか。また、志願前相談を実施したことによって去年までと変わった点や、特別支援学校へ入学してくる生徒達の課題が見えた等、気づきがあったか。
県立課長	本県の特別支援学校の体制は全国でもかなり優遇されております。幼稚部もありますし、高等部では入学希望者をほぼ全員受け入れております。今回、さらに志願前相談をしながら、志願者の状態を把握しております。従来は特別支援学校の中等部から一般高校を受験して不合格となった場合には戻る体制がありませんでしたが、今回から二次募集を実施しますので、そういう生徒も受け入れることになります。どのぐらい一般高校を受験し、どのぐらい戻ってくるのか、あるいは全員戻ってきた場合も含めて検討し、ゆとりある学級の設定をしております。
委員長	特別支援学校への入学基準はどうなっているのか。例えば知的障害等。
県立課長	例えば小学生の場合は、県の適正就学指導委員会があり、法令で定める障害の程度に応じて、特別支援学級や一般の小学校で受け入れるのか、特別支援学校の小学部で受け入れるのか判定します。学校教育法施行令第22条の３に基づき、障害種に応じて対応しております。
委員長	高等部の場合はどうか。
県立課長	高等部の場合は、中学校から来る場合にはほぼ全員受け入れますが、一部の特別支援学校が過密になったり、そのため通学区域の検討が必要になる場合がありますので、中学校の特別支援学級の状況等も掌握した上で、事前に就学相談や希望調査を実施して慎重にやっております。
委員長	発達障害の子達や、特別支援学校の基準には満たないが普通高校に行くにはちょっと辛いというような子達に関してはどうか。
県立課長	発達障害の場合は一般高校や専門学校等に進学することになります。
県立課主任指導主事	特別支援学校は、学校教育法施行令第22条の３に該当する子供達が入学対象となります。発達障害の子供達は、学習の不適応等があって学習についていけない場合に検査でＩＱ等を測り、学力が下がってきて、ある程度年齢が経ち、知的障害の診断等が出てきた場合には、入学できるようになります。
委員長	今後の課題として、特別支援学校に該当しないが普通高校に行くのはちょっと辛いという子達にどのように対応するか検討する必要があると思う。

鎌田委員	志願前相談を導入することによって偏りは解消されるのか。
県立課主任指導主事	志願前相談には、その子が特別支援学校の該当かどうかを確実に把握する目的があります。直前に志願して、実は該当しないということになると志願者が慌てる状況になりますので、そういうことがないように、事前に確実に診断等で見て、特別支援学校の該当でない場合には相談して別の進路を紹介することも含まれています。
教育長	今回の二次募集導入は、これまでの特別支援学校または学級の父母の方々の強い要望に応えて改正したものです。これまでは一般高校受験で不合格となった場合には特別支援学校の受け皿がありませんでした。今回、この子達が一般高校受験で不合格となっても二次募集で特別支援学校で受け入れられることになりました。特別支援学校の高等部では、希望すればほとんど全員受け入れておりますので、二次募集で特別支援学校に来るかも事前に調査して定員を策定しております。今まで以上に少し幅を広くして、一次募集で不合格となった生徒が来ても対応できるようにしております。
委員長	では、このとおり決定してよろしいでしょうか。
各委員	はい。
委員長	このとおり決定します。 議案第３号・４号は非公開になりますので、その前に話し合いをしたいと思います。今年、公安委員会、那覇市教育委員会、島尻、宮古、中頭、国頭のそれぞれ地区の教育委員、教育長を含む教育委員の皆さんとの意見交換会を重ねてきた。11月５日には国頭地区の市町村教育委員の皆さんと意見交換会を行い、いろんな意見が出た。皆さんとても喜んでくれて、懇親も充実した形ですることができた。そこで伺ったことと、同日に視察した宜野座高校と高江小中学校のことを合わせた各委員の皆さんの感想を皆様にもぜひ聞いていただきたい。安次嶺委員は学会のため不参加でしたので、中野委員からお願いします。
中野委員	宜野座高校では頑張っている様子を見て、たいへん素晴らしいと思った。特に、村に塾がないということで、村あげての協力体制の下に無料塾をやっている取組等を聞き、非常に胸を打つものがあった。高江小中学校では、過疎化が進んでいることを目のあたりにして北部は大変だと思った。複式学級等で先生方も大変だと思うが、頑張っている姿を見てほっとした。 各市町村との課題についての意見交換会２時間では、時間が足りないと思った。目立ったのは複式学級における教員の体制。もっと加配できないか等いろんな希望があった。専門教科がもっととれないかという要求もあったし、免許外教諭が多いという悩みも聞かれた。こうした課題はまた事務局とも相談して、事務局に頑張ってもらいたいと思う。ただ、教科書の採択だけ

	はすぐできないかと思いながら聞いた。なぜ伊是名・伊平屋は島尻地区の教科書を使わなければならないのか。文部科学省に対して、強力な姿勢で沖縄の事情を前面に出せば、これからはできるのではないか。ぜひ頑張ってほしい。１つでも２つでもやっていかないと意見交換の意味がないので、実践できることをやっていきたい。
新垣委員	宜野座高校は、学校の運動場の他に村の運動場を自分の学校の様に使え、子供達が部活でものびのびできる良い環境にあること、そして地域の方々が村に１つの高校を自分達の学校というプライドを持って見守っていることに、宜野座高校の子供達が羨ましくなった。高江小中学校では、こんなにも子供達の数が減っているのにびっくりした。小さいところだが子供達の目は輝き、少ない人数でも一生懸命やっていた。物怖じせずにいろんなことを見せようとする姿は、小さくともその場に応じた教育がされていると感じた。 国頭地区の市町村教育委員との意見交換会では、地域の実態を直に聞けて良かった。地域にあった教員を配置してほしいという要望と、空いている教員住宅を山村留学に取り組んでいる家庭に貸してもらえるようにしてほしいという要望があったので、私からも要望しておきたい。教科書の採択の件は変えないといけないと思う。何十年経っても変わらないのは、どういう動きをしたのか。気づいた時に少しでも働きかけをした方が良いと感じた。
鎌田委員	宜野座高校では、学級減となった結果、志願してくる生徒達のレベルアップに向けて取り組み、その成果が出てきていると感じた。環境に恵まれているので、あとは係わる人の問題だと思った。高江小中学校も、小規模校ながら先生方が頑張っていた。両校に共通するのは、校長が情熱をもって取り組んでいるということ。宜野座高校の校長は宜野座高校が大好きだと、高江小中学校の校長も毎日来るのが楽しいと言っていた。管理職がそういう姿勢で学校経営、運営に当たっていることが教育を実践していく上で大きなキーポイントになるのではないか。情熱だけではなく、無理をせず、力まず、自然体で、しかし気持ちを向けて地域にとけ込んで勤めていることが、教員や子供達が生き生きすることに繋がっているのではないかと感じた。 国頭地区市町村教育委員との意見交換会では、名護市が県内初の小中一貫校を検討中で、地域と何回も話し合いを重ねて進行中とのことだった。いいモデルになるように、県もバックアップできればいいと思う。教科書の採択の問題は、伊是名・伊平屋から同じ北部に転校した時に教科書を変えなければいけないという子供のデメリットもあるが、北部地区で研究会をする教員のデメリットもある。教科書をテーマにした研究会では伊是名・伊平屋の教員だけ違うことになる。長い間その歪みを抱えながら今日まで来ている。県がこの辺で真剣に取り組んで風穴を開ける方向に向けたらいいと思った。ま

	た、離島への人事配置についての要望もかなりあった。２～３年で７～８割が本島に戻ってしまうということだ。これは北部地区だけではなく、離島圏の学校数が多い沖縄県が抱える問題だと思う。北部地区では学力の問題も大きいという話もあったが、その背景には、児童生徒の原因だけではなく、都市地区ではないための人事の仕組み等も合わさった結果が学力にも出てくるのではないかと思った。かなりの市町村から要望が出たので、その声を受け止めて解決に向かってほしいう。
委員長	過疎化が進んでいる国頭地域の実態を改めて感じたが、皆さんからの御意見にもあったように、子供達の素直で生き生きとした姿が見れ、地域で子供達を育てるという意欲も強く感じた。沖縄県138万2000人の人口の中で、高校がない離島の人口が21,000人強で、1.5%ぐらいである。国頭地域は比較的近いので、もっと離れた離島に比べると便利かもしれないが、やはり過疎化が進んでいるというのはものすごく重たいと感じた。本部町では、34回も説明会、意見交換会をして学校の統合にこぎつけたという話もあったし、名護市はこれから学校統合に取り組まなければならないということだった。その中でどうやって学校を存続させるか、子供達を健全に育成し、学力を向上させるかについて、思いをもった委員の皆さんとともに、本当に熱い議論、意見交換になった。中でも人事の問題では、いい先生を配属してほしい、加配してほしい、複式があまりにも多いのをなんとかしてほしいという声が大きかった。へき地、離島校では、大半が毎年半分以上、時には７～８割が入れ替わるという先生が安定しない状況で学校が運営されているということなので、何らかの手だてを打てないか、もっと重く検討する必要があると思った。 教科書問題もぜひ取り組んでほしいと思う。 認定こども園、幼保一元化の件については情報の少なさを訴えていた。どのような形で国が進めていて、県がどう対応しようとしているのか、情報がほしい、そして自分たちはどのように取り組めばいいのか一緒に考えたいという話があったので、義務教育課、教育事務所でぜひ情報交換してほしい。 宿舎活用の話が新垣委員から出たが、宜野座高校ではクーラーを自費で入れたくても、管理上、市町村が勝手にクーラーを入れたりはできないということだった。国が予算を出している施設の管理規則はいろいろ難しい部分があると思うが、運営費を出していいという話もあったので、制限を緩和する方法が何かないか検討してほしい。 どうやって教育予算を取ればいいかという相談もあった。県もまだだが、予算がどうしても必要だからぜひほしいと知事部局や知事、県議会に訴え、みんなで声を上げたら可能性があるのではないか、意見交換を重ねて気持ち

	を１つにして教育委員会としてちゃんと訴えられるようにしていこうと話した。実はこの件に関しては、公安委員会と意見交換した中で、子供達の健全育成に関して予算要請についても一緒にやっていこうという話になり、１歩進んだ。公安委員会とできるということは、市町村の委員の皆さんとも一緒になって声をあげることができると思うので、今後取り組んでいきたい。 意見交換の後の懇親の場で、教育事務所の社会教育主事について、地域連携や子供達の健全育成等の活動の中で社会教育主事がほしい、もう少し増員できないかという話もあった。今後の教育は学校教育だけでは難しいと思う。その中で社会教育主事をもっと増やし、強化してほしいという声も上がっていたので検討してほしい。 国頭地区市町村教育委員会との意見交換とは別に、11月10日から12日まで奈良・京都の視察に行ってきた。京都では、長年小・中学校の先生をし、中学校の校長職で退職してからフリースクールを作った、御両親が沖縄出身の比嘉昇先生という先生のフリースクールを視察し、意見交換した。その後、京都市教育委員会と意見交換し、翌日に小中一貫校の御所南小学校、そして「堀川の奇跡」と言われる堀川高校を視察した。この視察についても先生方から御意見・御感想を伺い、皆さんと共有したいと思う。
安次嶺委員	御所南小学校は京都市の真ん中にあり、過疎化に伴って小学校５校を統合した小学校で、京都の古い町をベースにしている。非常に感動したのは、学校で行っている教育の一環として、地域の町衆、要するに町の人々が参加していろんな講義をすること。技術工芸、料理、お茶、お花、服等、京都にはありとあらゆる日本文化の粋があり、町中で伝統が息づいている。そしてその町中の職人の方々が学校に来て子供達に伝統的な物作りや文化を教えている。地域の人達が、本当に自分たちの学校であるという気持ちを持っている。学校にもいっぱい掲示物があった。すごい日本文化が京都に集中してあるわけで、そういう点では沖縄と似ている。沖縄には、踊り、料理、工芸等、独特の文化がある。となると私達は沖縄で子供達に何を教えているだろうかと思った。今でも学校でいろんな地域の伝統を教えていると思うが、京都では本当に生活に根ざした地域の人達が学校に来て手作りの授業をしている。沖縄でも、たくさんある沖縄の伝統文化をもっと積極的に子供達に教えるべきだと思う。学校の先生ではなく、地域の市民が教える形で。京都のその原動力は何かというと、町の人達による学校の応援部隊である協議会だ。ＰＴＡを非常に強力にして、みんなで学校の運営に積極的に関わって意見を述べるというもので、普通のＰＴＡの感覚ではない、学校の教育を支援する地域の人々のしっかりした大きな組織があり、教育に大きな力を果たしている。沖縄県でもそのくらい小学校の子供達に地域の誇るべき伝統文化をしっ

	かり教育して、子供達が他の勉強もするようにできればよいと思う。沖縄の教育は、全国の試験を受けて全国の点数を追っかけるといつも言われるが、もっと沖縄に根ざした、沖縄の文化・歴史、諸々のことを、もっと子供達に教えるべきではないかと感じた。
中野委員	学校教育だけではダメだ、地域も家庭も一緒にやらなければいけないとよく言われるが、実際に行動しているのは一部の方だけで、それほど広がっていない。京都市ではこれを大きく広げて地域で広がる人作り活動をし、教育、保健体育、青少年育成財団団体、女性、医療、福祉、文化、スポーツ、経済、マスコミ等の団体が参加して、みんな一緒になって教育をする「人づくり21世紀委員会」という非常に大きな仕組みがあるようだ。その委員会では、いわゆる「家庭の教育力向上」「地域ぐるみの安心・安全」また「道徳・心の教育」等の各種委員会を作っている。これだけの集団が集まって、本当に真剣に取り組んでいる姿が、あの小学校の姿であり、高等学校の姿だった。幸い、沖縄も文化遺産が多く、京都に負けないと思うので、我々も地域ぐるみで、マスコミも一緒になって子供達を教育しなければいけないと感じた。　また、京都市では、課題が大きいだけにぜひやらなければいけないということで、「子どもを共に育む京都市民憲章」を作って取り組んでいる。
新垣委員	今回の視察では、国際交流子ども館の理事長夫妻に会い、本当に人間が好きで、子供の教育を真剣に考えていると感じた。財産を投げ打って子ども館を建てる等、普通の人ではできない。比嘉先生の言葉の、「信じる」、そして子供に一番大事な「待つ」、そして「愛する」この３点が、子供にとって本当に必要ではないかと思う。昔のお年寄りが「気持ちを長く持たないと子育てはできない。」と言った言葉が、本当にそうなんだと思い出される。我々大人はちょっとしたことで苛立ったり、子供を叱るが、やはり待つ心は大事だと思う。比嘉先生は親御さんが沖縄出身だが、昔の沖縄の方は、学問は十分でなくても教訓歌で我々を育ててきた。今は教訓歌で子供を育てない時代になって、そういうことが分からなくなっているのではないか。紙の上の勉強ではなく、昔から伝わる教訓歌も大事ではないかとも感じた。沖縄にも比嘉先生のような方がいて、ボランティアでこのようにＮＰＯを立ち上げて子供を笑顔にできたらいいと思う。沖縄にはおせっかいおじさんやおばさんが大勢いるので、こういう仕組みがあれば皆さん協力できるのではないか。今は仕組みがない中、実際に行動を起こす力が弱いので、沖縄にも不登校の子供達が入れるような、自然の中でこういうものを開いてほしいと思った。 御所南小学校では、ＰＴＡの方に話を聞くと、30分でも協力できる方の組織図があって、朝の交通安全や、帰りのお帰りなさいの声かけを要所要所に立って30分でも割り当ててやっているということだった。仕事しているから

	できないというのではなく、できる人でやっていると、やらない人も何か悪いなという感じで足を運んで協力してくれるようになるということで、子供を愛すると同時に、学校、地域そして人を愛している地域だと感じた。公開授業では、子供達がのびのびと授業しており、先生と生徒がマッチした教育がなされていると感じた。沖縄でも公開授業がある時は見学してみたい。
鎌田委員	御所南小学校は５校を児童減で１校に統廃合した学校。ややもすると、行政は統廃合を決定した後で地元に理解を求め、時間をかけて話し合いをするというのが、どの県でも一般的な姿ではなかったかと思うが、御所南小学校では、「どんな学校にしたいですか。」という呼びかけから統合が始まっている。「どういう学校だったらみんなが満足するでしょう。」と投げかけて教育行政、現場の教員、地域で組織を作って話し合って実現させたというスタートに、今充実している大きな根っこがあるのかと思う。目指す子供像を地域と共に作ってきたということが、今後沖縄県がいろんな教育改革をしなければならない時代の中で参考にしていきたい部分だ。 今度改訂の学習指導要領でも「生きる力」は根底に押さえている。御所南では生きる力をどう具現化するかという時に、新しい学校で新しい教育を創造していくというテーマを掲げる。そして、従来の「教師は教える人、生徒は教わる人」という関係を変え、生徒は自ら考え自ら学ぶ力をつけるというふうにして、教師は教える人ではなく、子供達の学びを支援する立場だという骨格を作っている。小中でいう生きる力は、自分の考えを築きながら学ぶ力を深めていく力であり、そのためには思考力、判断力、会話力、表現力、もろもろの力がないとそこに向かわない。その力の根底には読書力が必要であるという結論に至って、教育課程の中に読解科という特別な科を置き、１年生から中学まで、すべてそこを柱にしながら各教科のプログラムが作られているということだ。全国初のこの読解科の中で、コミュニケーション力、主体力、自発力、こういうものに向かって授業が展開されている。１年生から５年生まで、教師が進行役ではなく、児童２人が司会をして授業を進行していた。45分の授業時間のうち、話す時間何分、相談する時間何分、書く時間何分というふうに決めて進めていた。この方法は沖縄県の現場でも行われてはいるが、教師が黒板に立って長く何分も説明するということはしない。教師主導型ではなく、児童が主体的、自発的に考えるという授業実践であった。そのような実践が実現するための第１のベースが読書力、その次が問題を設定していく力や情報を活用していく力等という構造が、徹底した共同研究で、全学校、全教員に浸透している。そうなるためには地域の力も必要だ。地域の声を吸い上げているので、当然最初から地域の協力なしにはこれは実現していかない。最初の段階で、地域参加の必然性、役割を位置づけて

	向かっていったということは、本当にいい勉強になった。 　堀川高校の視察で感じたのは、新しい時代に向かうには新しい概念でということ。堀川高等も自分たちが本当にしたい教育は何かということを教員達がとことん議論したということだ。そして行き着いたのが「自立する高校生」を育てること。そのため、生徒が自分で自分達の課題をもって突き進んでいくという、全国初の「探求科」を新設して取り組んでいる。そして、理想の教育と進学の成果の「二兎を追う」を目指しているということだった。ただし、「良い大学」への進学は意識しておらず、進路相談もしないとのことだった。探求科で培った力で、どういう理由でどの大学のどのコースを受けるかを、ほとんどの生徒が自分で掴んでいるということだ。そこまでの教育力、人間力がここでも柱になっている。生徒達が自主的に自発的に学び、結果として、国公立の現役合格者が６人だったのが、新しい教育改革をスタートして翌年には236人中106人が国公立に現役合格し、奇跡の堀川高校と呼ばれるようになった。そこでも、学校経営者だけではなく、どんな18歳を育てたいのか、そこに時間をかけ、市民を参加させながら、教育方針を打ち立てていっている。スタートの時点でしっかりと、誰が管理職になっても受け継いで行かざるを得ない教育理念を打ち立ててスタートしたという、その考え方はとても大きな学びになった。
安次嶺委員	御所南小学校で小学生が自分たちで授業を作っている様子に、感銘を受けた。司会の子が２人いて、時間も決めて、指名して意見言わせてそれをまとめていた。低学年はあまり上手くまとめることができないにしても、自分たちで授業を進めてみんなで１つのものを作るというこの形態が素晴らしい。この子達が大きくなったら、すごく期待できるのではないかと思う。このような手法に大変感心し、将来、フォローする必要があると思った。
中野委員	堀川高校の学校経営は素晴らしかった。進学を目指す視点だけではなく、人間力を高めるという視点が中心になっていて非常に良かったと思う。 　ただ、やはり触れておかなければならないのは子ども館のことだ。比嘉先生は夫婦で理事長、館長をしながら京都府教育委員会認定フリースクールを作っている。その比嘉先生の言葉を紹介したい。「日本は子供を待ってあげる時間を許さない社会になってしまいました。でも、人間はそんなに器用じゃない。」そういうところから不登校の生徒が増えていないだろうか。不登校の子は全国に14万もいると言われる。今は社会の大人の引きこもりに直結しているのではないかということを両先生は非常に意識していたようだ。そういう中で自分達の退職金を全部、子ども館を作るために使ったということだ。そして、生き生きと仕事に専念していた。比嘉先生はこういうことも言っていた。「人格を見ずに人を育てようとしても、心を失った機械が作られ

	るだけだ。」「人を信じ、待ち、愛することで人は人間らしく成長するのではないか。」とも書いている。教育の原点とは何かを考えさせられた。
委員長	たまたま新幹線の中で開いた機関誌で比嘉昇先生が書いたエッセイを読んで、京都視察ではぜひ比嘉先生のフリースクールに行きたいと思い、お願いをした。今の沖縄県の教育では健全育成はとても大きな課題だと思う。深夜徘徊、飲酒、喫煙、孤食児童も多く家庭の温かさに飢えている子供達が多い、人と触れ合うこと、コミュニケーションも苦手になっている子供達が多いという中で、その子達をどのようにして健全に育成するかということについて、学びを得るために、フリースクールの比嘉先生のところに伺った。 また、学力向上、生きる力をいかにつけていくかについて、学校教育だけでは難しい時代になってきている中で、地域、企業、そしていろんな機関が一緒になって子供達を育て、協力しあっている京都の素晴らしい取組を研修させていただいた。御所南小学校は15年、堀川高校は11年の期間でここまで素晴らしい学校をつくり、素晴らしい生徒達が育っているという実例を目の当たりにしたが、そこにはやはり京都市の教育改革がある。御所南小学校では、町内のいろんな分野の方々が授業をしたり協力したりしているが、それが300人を超えている。京都市内では、子供達に帰りに声かけをしたりするボランティアや、見守り隊という地域の保護者や住人、学生、企業の皆さんが３万人超えているとのことだ。防災訓練をしたら1000人集まったというぐらい、地域が子供達を一緒に育てている。これは市民ぐるみ地域ぐるみの取組、市民と共に教育改革を着実に実践をしていった結果だと思う。「広げます！子育て支援の輪」「育みます！『確かな学力』『豊かな心』『健やかな体』」「進めています！教員養成・教育の資質向上」どれも成果を上げている。また京都市は、市民憲章とは別に「子どもと共に育む京都市民憲章」を作っている。市をあげて、教育はみんなでやるものだ、みんなで一緒に作っていこう、ということで様々な活動をした結果、御所南小学校のように小中一貫校で、子供達が自ら見つけ考え学んだことを実社会や実生活に活かせる力が育まれている。 そして堀川高校。資料には「豊かな学校とは言葉を大切にする学校、言葉を通い合わせることのできる学校、考える頭と感じる心を育てる学校、様々な経験を積み重ねることのできる学校、そこで学ぶことによって想像力と創造力に富み、判断力と行動力を備えた自立する18歳が生まれます。」と書かれている。堀川高校の生徒は、勉強も一生懸命だが、体育祭のあり方もみんな自分達で決める。一般でいう修学旅行の「研修旅行」も、どこに行き何をするか全部子供達が決める。学校の行事も学習も子供達主体で物事を進めていくという自立した子供達を育てている。子供達が感じる力、好奇心を持っ

	て自ら学ぶ力を育てれば、自ら生きていく力も生まれてくると感じた。 　11月に京都視察と国頭地区教育委員会との意見交換会をしたのでまとめて報告したが、この合議制の教育委員が何のためにどんな活動をしていくのか、沖縄県の教育行政をより良くするために私たちができることは何か、それをどういう形で働きかけ、事務局と共にどういうふうに動くことが、実践、成果、改善に繋がっていくのか、これからいろいろとコミュニケーションをとり、意見交換会をし、みんなで取り組んでいきたいと改めて感じた。連携の最初はまずこの会議だと思う。そしてたくさんの人たちに連携、協力してもらうことで、沖縄県の子供達が元気に、健やかに、そして夢と生きる力をもって生きていけるような沖縄県を作っていきたい。 　休憩します。 （以下は非公開部分のため省略します）